「教養科目におけるペア科目の活用方法と教育的効果」

研究代表者　上垣　豊　（法学部）
共同研究者　田口　律男　（経済学部）
小長谷　大介（経営学部）
谷垣　岳人　（政策学部）
東山　薫　（経済学部）

1 今年度の課題と取り組みの概要について

単位制度におけるペア科目（週2回の授業）の意義を学び、本学の教養科目のなかでペア科目が教育効果を発揮する条件と活用の課題を検討し、カリキュラム開発と授業方法の改善に役立てる。これが本研究の目的である。

申請書には、今年度の具体的活動として以下の7点を掲げた。(1) 外部から講師を招いて研究会を開催する。(2)PJメンバーの間で具体的経験をだして議論する。(3)何人かの担当者にインタビューして聴き取り調査を行う。(4) 新旧カリキュラムでのペア科目受講者の変化を調べる。(5) ペア科目を受講したことのある学生に聴き取り調査をする。(6) 授業評価アンケートの活用など、教育効果を測定する方法を検討する。(7) 受講生へのアンケート項目を作成し、試験的にアンケートを実施する。

このうち、(1)については、10月22日（木）に追手門大学から池田輝政先生（学長補佐/アサーティブ研究センター長／基盤教育機構教授）をお招きし、「セメスター制と週2回実施授業（ペア科目）」というタイトルで研究会を行った。(2)と(6)は研究会の打ち合わせ会議（6月17日、10月14日、2月9日の3回）、3月3日のFD研究会の場で行った。3月3日の研究会は「ペア科目と教養教育」というタイトルで、第一部で上垣の近著『規律と教養のフランス近代』（ミネルヴァ書房、2016年1月）をてがかりに、川島伸博先生にコメントを頂いて教養教育について議論し、第二部で田口律男先生と土屋和三先生にそれぞれペア科目の教育実践について報告をいただいた。

(4)については、詳しく数字を検討していないが、一部で懸念されたペア科目の受講生数の大幅減が生じなかったことが確認された。(5)は、ペア科目を受講したことのある何人かの学生や、学生時代にペア科目を受講した数名の職員に質問してみたが、「一度で4単位取れるが、その代りリスクが大きい」という感想が返ってくる程度で、詳しい聴き取り調査にならなかった。(7)は田口先生が前期に「日本の文学A」の受講生を対象にアンケート調査を行なった（別添資料参照）。

2 池田輝政先生の報告要旨

以下は、10月22日に行われたFD研究会（和顔館4階会議室2）での池田輝政先生（追手門大学学長補佐）の報告とその後の質疑応答の録音を基にまとめたものである。なお、池田先生のご報告は追手門大学の教育改革全般にわたり、さらに日本の教育についても示唆に富む興味深い内容であったが、この報告書に掲載したのは、主に本共同研究のテーマであるペア科目に関連した部分に限定されている。

****

池田輝政先生:

今日のテーマのセメスター制度、ペア科目は実は私の大学のテーマでもあります。今日来ましたら、龍谷大学ではもうペア科目を実施されているとお聞きしました。これだけで

も、十分私たちには応援の情報になりました。

追手門大学では、５年後に学期制の改革を予定しています。基本的にはクォーター制への変更を目指しています。まず海外を目指す場合、クォーター制のように短期のほうがやりくりしやすい。交換留学生を増やそうとしていますので、外国から留学生が来たときに半期である程度の単位を与えてあげたほうが、サービスになります。追手門では交換留学生もまだ１０名前後です。３年から５年後には５０名にして、将来的には１００名ぐらいにしたいと考えています。

我々のような大学であると学生の学びの効率、集中度が問題になります。今のセメスター制では学生は半期１０科目もとって、一日に４科目をとる場合は午前中に授業を受けると午後は疲れ果ててしまいます。同じ科目は１週間に１回という集中力を欠く状況で、我々は３限４限５限と授業を続けていてよいのか、本当に大学は教育機関と言えるのか、と真剣に議論しています。教室に入ったら学ぶ意欲のある顔をしている学生を見たい。今は元気のない顔ばかりが目につきます。しかし学生を責めるのではなくて、環境から作りかえていく。そのために学期制の変更を改革課題にしています。

学生の学びの効率と集中度から考えると、現在追手門は２単位科目で動かしていますが、単位数分布のピークを２単位科目から４単位、３単位へシフトしていく。そうすれば科目の種類は減るはずです。１５週１回の２単位科目ばかりだと内容を無理に押し込むような感じになります。その上、アクティビティを取り入れると時間がなくなって、ついつい学生の理解を確認せず「さあ次行くぞ」と言ってしまうことになります。だからもっとゆとりをもてるような科目を、全部とは言わないまでも一部でも徐々に作っていきたい。

教師の授業効率からも考えています。私は名古屋大学では大学院で３科目３コマ、名城大学では学部１２科目６コマ教えていました。今、追手門ではすこし減らしてもらって３．５コマです。科目数が減ると集中度が違ってきます。経営はそこがわからないから教師がさぼらないようにと考えて、コマ数をどんどん増やそうとするのかも知れませんが、そうであればそれは勘違いです。教師には授業準備があり、毎回の授業シナリオをつくり、終わった後にも振り返りシートをみたり、次回の授業の作戦を考えたりします。見えないところで授業には時間を結構使っています。この教師の側面からみた授業の効率、効果から考えても、週一回の２単位科目のみの学期制という環境には問題を孕んでいます。少なくともセメスターで画一的な２単位科目をばらばら行っているのではだめではないか。このように学生と教師の両方の視点から学期制度の課題を考えています。

本日は教師の授業効率、教師と授業時間の視点から課題をもう少し深めたいと思います。我々は学生の教育から充実感を味わいたい。毎日の我々の授業がこの仕事の喜びの糧です。そのために授業を改善したいというのが基本ではないでしょうか。しかし、教員の仕事時間はどうでしょうか。例えば、2014年にOECDが主要先進７ヶ国の中学校教員の仕事時間の平均をだしています。日本の中学校の先生は週に５４時間、７ヶ国平均では４０時間ですから、日本の中学校の先生は働きすぎています。授業時間の平均値はあまり変わりません。多すぎる部分は、中学校では課外活動が８時間です。それから一般事務に使った時間が違います。大学と違って事務職員の方がいないので自分たちで全部事務ワークもしなくてはならない。これらが働きすぎの要因になります。

それでは大学教員の仕事時間はどうでしょうか。実は大学も同じようになってきています。大学教員の仕事時間の調査も行われていますが、その中で、私のかつての職場の同僚であった浦田広朗先生の調査を紹介します(「大学教員の時間使用と授業改善」『大学・学校づくり研究』、2013年、第５号)。教員の仕事時間の国際比較をした結果によると、教育に割いている時間では日本は７番目です。教育時間は研究時間とは順位はそれほど変わ

りません。にもかかわらず教育に割く時間のほうが少ないように言われています。日本の場合は管理運営に割く時間が多いのかと思っていたら、それほど多いわけではない。このように仕事時間に関しては、他の先進国と中学校ほどの開きはないことになります。

研究活動が日本の大学教師の教育活動を大きく阻害しているとよく言われるが、そういう証拠はない。教育時間は世界に比べてけっして短くはない。これが浦田さんの結論です。ではなぜ研究活動が教育活動を阻害しているといわれるのか。その疑問を進めて、浦田さんは授業準備に焦点をあてて仕事時間の分析を試みています。かつての私のように、大学院も含めて担当の授業コマ数が１２コマあったときには、指導時間や授業準備がきつくなるように、準備時間も含めると教育時間の総量は、コマ数が上がるたびに増えます。総量を増やさないためには、授業準備の時間を減らす必要に迫られます。そうならないためには、コマを減らす必要がありますが、コマがあまり減らせない場合は、たとえば、１科目を４単位科目にできれば、２科目なら８単位となり、これで授業準備を充実させて半期を終えることができます。

授業準備に焦点をあてて仕事時間の分析の結果は、大学院と学部の授業の活動を同時に担当するときにはトレードオフの関係があるという結論です。大学院の授業を担当していると実は学部の授業の準備時間にいろいろ影響がでるということです。これはとくに大学院生が大勢いる研究系の大学で顕著です。かつて勤めていた名大の経験では、工学部のある若手の先生が、研究指導は１人につき５分とか言っていました。製品をつくる生産ラインのような時間管理です。８時間労働という考え方で仕事時間を決めていない大学教師の場合でも、当然ですが上限があります。そうであれば、学部の授業準備時間確保には大学院の個別指導が影響を与えるトレードオフの関係が生じることになります。現実に、国立大学、特にグローバル経営にうってでる大学では大問題になっています。

学期制の改革課題にクォーター制があります。クォーター制への改革を行うと教育の効率が上がると思っています。アクティブラーニングの授業運営にはそれに見合う授業準備時間が必要になります。ところが、現状のコマ担当のままでは多忙化するため、アクティブラーニングを導入しても、そのための準備時間を増やすことは難しい。その結果、アクティブラーニングの果実が見えなくなってしまう。ですからクォーター制にして教員と学生の１学期の科目数を１０科目からぐっと減らすことを考える。海外からの短期留学を増やす課題をもっているところも、クォーター制のほうが柔軟に対応できると考えます。要するにセメスター制２単位科目のカリキュラム運営の画一化が問題です。

龍大はペア科目４単位の運営が行われているので画一型ではなかったのですね。現状はほとんどの大学が２単位科目のみのカリキュラム運営です。この画一的な運営を打破するヒントは高知工科大学から学びました。高知工科大学では全科目選択制を原則にしていて、必修科目はありません。必修・選択よりは履修指導を重視しています。感心したのは、学則上はセメスター制をとりながら、前期・後期の授業期間をそれぞれ２分割して、実質的に４分割のクォーター制に近づけています。数字でいえば１学期が８週１６コマの授業で動かしています。しかも、すべての科目をクォーター科目で運営していなくて、科目の特徴に応じて柔軟な運用が行われています。たとえば、哲学などは集中するよりじっくり教えるのが良いのだと、通年科目になっているそうです。スキル習得科目はクォーター科目にして月曜と木曜、火曜と金曜の基本パターンでペア科目になります。横展開だけでなくて同じ曜日に縦展開のペア運営も行われています。この「ペア」という言葉を高知工科大学でも使っていました。科目群は学期科目と通年科目というような割り振りです。数学などは系統的な集中学習が必要なのでクォーター科目とし、単位を落とした学生には半期のなかで再履修可能にしているそうです。教員にとっては担当する科目を３つのクォーター

に集めて、残りのクォーターは余裕が生じるので、研究時間にあて、海外調査などをする時間が作れます。こういう利点もあります。

結びです。追手門学院大学では、これまでのセメスター制を見直すことを提案しています。受け入れられれば、あとは、これからの５年を目安にしてどのように移行するかという問題に取り組むことになります。同時に、今の科目はほぼすべてが２単位科目運営ですが、それを３単位、４単位の科目運営にシフトする考えも提案します。科目の統合などで膨らんだ科目数も減るはずです。その先には、３単位、４単位科目運営のシラバスの書き換えも生じます。これらが私にとっての目下の改革課題です。

質疑応答

小長谷：クォーター制とペア科目はある程度セットになっている印象を受けます。

池田：確かに今はセットとして見ています。完全セメスター制に移行するときに、本来は前期４単位、後期４単位、とすべきでした。ところが、通年４単位で教えていたものを２単位＋２単位に分割して科目名をⅠ・Ⅱのように名称変更してしまった。そこから２単位科目運営が全体に広がってしまったのではないでしょうか。選択制を絡めると１つ１つの科目内容が２単位では薄まらざるを得ないか、逆に無理に押し込めざるを得なくなる。１５回の授業回数は長いようで実は短いのではないでしょうか。アクティブラーニングを導入すると、既存の授業内容をかなり削減せざるを得なくなります。そう考えると、４単位科目であったものは基本４単位に戻すという考え方も大切になります。ミネソタ大学の自己点検評価を１０年前に読んだことがありますが、工学系でしたが、ほとんど４単位か５単位の科目が全体の半数以上を占めていました。２単位や３単位に比較して４単位か５単位がピークになっています。

田口：それはどのようにしているのですか。

池田：ミネソタ大学の場合はセメスター制でした。クォーター制では忙しすぎて、セメスター制に変えたと確か聞いたように思います。体系性のある科目をきちんと教えるには１つの学期で４単位くらいが必要である、というようなコメントが書かれていました。これはヨーロッパも同じではないかと思います。とくにサイエンスの基礎を２単位で教えるのは無理ではないでしょうか。

小長谷：４分割すると相当いろいろバリエーションが生まれますし、単純に半年か１年かではなくて、１年通じてもいいし４分の１の時間でやりきろうということにもなります。

池田：多様性につながるのです。私はこの多様性の魅力に飛びつきましたね。１単位科目があってもいいのです。

田口：しかしここまでしてしまうと細切れになってしまうのではないかと。

池田：けれど、週３回できるような時間割りができると、語学の先生は喜びますね。

村岡(「アジアの歴史」などを担当)：基本的にクォーターのたびに成績を出すということですか。

池田：そうです。だから教務と話あって教務を巻き込む必要があります。学部教授会だけで決められる話ではないですから。

松木(「微分と積分」などを担当)：週２回にすると、学生が他の科目がとれないと言って嫌がります。

池田：学生の今の履修の現状を前提にすると、やるしかありません。

谷垣：留学生を増やすというのは短期留学生を増やすことでしょうか。

池田：まずは増やすためにはそれが現実的ではないでしょうか。

谷垣：ただ日本では言葉の壁があります。英語圏だったら、クォーターで短期留学はありうると思うのですが、日本に来る留学生がクォーターできて少しだけ勉強する学生をどこまで増やせるのでしょうか。こちらが英語の授業を完全にコンスタントに提供するぐらいにならないと来ないのではないでしょうか。

池田：追手門では、長期的には、国際交流センターが短期留学の責任部署になる必要があると考えています。学部は短期留学の制度に関心があまりなく、本気では動きません。学部の外に単位認定も可能な交流プログラムをつくる工夫も必要です。

小長谷：龍谷大学ではペア科目が継承されているので、良さもわかるのですけれど、担い手の教員の大変さもあります。クォーター制だと少し軽減されるかもしれませんが、例えば専任で持つ傾向が強くなると思います。基本は専任で持つようにお考えかもしれませんが、大学ですからいろんなバラエティに富んだ科目があるが当然で、外の人を呼んで担ってもらう必要性もあると思います。非常勤の方には、週2回来なくてはいけないので、あまり喜ばれないのではないでしょうか。

池田：高知工科大学では、非常勤を視野に入れて同じ曜日に縦展開のペア科目をパターンにしていると聞きました。

小長谷：たとえば龍谷大学の場合、月３木３のパターンと火３金３のパターンとすごくびしっとやっています。だから月曜日、金曜日など、違うパターンが取れません。たしかに、横ではなく、縦も可能ですね。

池田：それが工夫のしどころです。

松木：今なら、前期に全部集中して１０コマやって後期０にするのは不可能です。教員の昇任では、授業にどれだけがんばったかはまったく反映されず、研究の内容で承認されていくわけです。ところが、だらだら１年間やって、結局研究活動ができないまま１年終わってしまう場合も割合多いと思います。あとの３つのクォーターが大変ですが、ひとつのクォーターで研究に没頭できるのはすごく魅力的だと思います。

池永(大学評価室)：早稲田大学がクォーター制を導入した話ですが、グローバル化への対応が出発点ですが、先生方を説得する一番のインセンティブ要素がまさに、１クォータープラス夏休みを使って短期留学のようなことができる、あるいは研究に専念するような機会が設けられることでした。ICUはトランスファーセメスター制ですが、教養教育なので、それぞれの科目の特性に応じて実験だから３講時連続であるとか、あるいは週３回開講科目とかそのような非常に柔軟性のある時間割マップを運営されていると聞いています。ところが、うちの場合はどうしても専門教育と教養教育の時間割フォーマットの棲み分けができてなくて、ここは専門科目の枠であるとか、ここは教養教育の枠であるとか固定化されていて、その上、月３木３などと固定化されていて、柔軟性のあるカリキュラムになかなかできないのではないかと思います。

池田：そこは教学執行部のリーダーシップが必要です。教養教育と専門教育の全体を調整する責任を引き受けないかぎり、部局ベースでお互い話されても枠の奪い合いになります。

上垣：会議では「自然科学系では通年科目がいまだにあるのは問題だ」という意見が多数派です。セメスター制だから、全て半期で完結すべきだ、という話になってしまう。管理主義的に通年科目を全て廃止させようとしたがる。

池田：学びの中身が大事ですから、それを楽しみながら議論する雰囲気をつくっていくしかない。

上垣：心理学の東山先生は、今年から赴任されて、いきなり週２回の授業を持っていますが、何か言っておきたいとはあるでしょうか。

東山：前期はずっと、毎日が授業準備で終わってしまいました。ペア科目以外にも１５コマの教科がさらに２つありますのでもう研究どころではなく、それこそ１０時ぐらいまで大学に残っていました。しかも大人数での授業が初めてで、それがまた苦労の種だったのです。ペア科目だと私は火、金なのですが、授業が終わってすぐにもう準備というような感じでした。ただ学生の意見を聞くとやはり時間的感覚が狭いので前に教えられたことを覚えているのでやりやすいという意見もありますし、他方ではいきなり３０回やっていきなり４単位落としてしまう可能性もあるので嫌だという学生もいて、半々くらいにわかれます。

村岡：学生はあまりペア科目をとらないという先生の意見もあるのですけれど、しかし私のペア科目には２５０－６０人くらいの受講生がいますし、東山先生の授業にも学生は大勢います。ペア科目だから学生が敬遠することはないと思います。

池田：新体制、新環境をつくれば学生は対応してくると考えますから、あまり心配していないです。むしろ学生の学力差にどういう風に対応していくかが課題です。とくに、学力差の大きい英語は学びの目標も含めてクラスを分けないといけない。目標は違っても単位数は等価でいいわけですから。でも、授業の中にアクティビティを取り入れて少し時間をとるようなことをすると、やはり４単位でないと難しいのではないかという気がします。

田口：４単位のペア科目で一つの授業のなかでアクティビティをいれて効果を発揮するために、何人くらいの規模と制度設計をされているのですか。

池田：現実にはまだそこまでは進んではいません。私の感覚では２４０人まではいけるのではないか。２４０人を２単位科目で教えた経験からすると、ディスカッションの時間などを設けると、時間が足りなくなります。

田口：では人数はあまり大きな問題ではないと。

池田：確たる根拠はないですが、２５０前後まではあまり問題ないかと思います。

村岡：ペア科目なら２５０－６０人でも可能ですが、逆に１５回で終わってしまうと本当に表面なぞったような授業になります。週一回のコマも私は持っていますが、１００人を切っているのでそれはちょうどいいかなという感じです。人数が多いとペア科目でしっかりやったほうがよいと感じます。

村岡：先生の話を聴いて、人数が多いとペア科目が必要になると思いました。

池田：大規模の場合はスチューデントアシスタントを使えばもっといいです。

上垣：週２回の授業だと前に座っている学生なら、その名前を覚えられる。前回に話しかけた学生や、印象に残った学生が何人かいると、授業が始まる前に行って、学部とか名前を訊きだすことができるという利点があります。

池田：週２回というのは学生との交流という点でも大きな意味がありそうです。

上垣：それが週１だとテストが終わって、答案をみたあとになって、「この学生、結構できるな」と思っても後の祭りになります。その後は会う機会もほとんどないわけですから。

国松(「人類学のすすめ」などを担当)：毎回コメントシートを出させてみると質問の数がペア科目の場合、非常に多かった。火曜に質問すると金曜にはちゃんと先生から質問に答えてもらえるというという印象があるのでしょうか。逆に週に１回の場合は質問した本人も質問の内容を忘れています。

村岡：学生とのコミュニケーションではペアとか通年科目がいいですね。私も通年科目をしていますが、それをなくしてしまえという意見もあるのですけれど、今年も通年科目で少人数科目を４月からずっとやっていて学生も次第に打ち解けてきて、今は授業が終わった後からでも突っ込んだ話をできるようになって、ゼミのような感覚で学生とも細

かいことを話せるようになってきました。これが半期で終わると慣れたか慣れないかわからないうち終わり、学生が入れ替わってしまいます。

池田：一般教育が2単位だけの科目になってしまうと、学生との人間関係は表面的なものになってしまいます。前任の大学ではゼミをもっていたので、学生とのつきあいには手ごたえがあったのですが、週1回の授業しか担当しない現在は表面的なような気がしますね。週2回であればコミュニケーションも深くなりそうです。

村岡：先生方のなかでわたしは唯一龍谷大学出身だと思います。私が学生のときはずっと科目は通年でした。研究の道に入って、龍大の教員になったわけですが、今の学生をみたらはたしてそういう人間は育つのかなとすこし心配です。その原因がこうした画一的な教育にあるのではないか、それが結局影響して学生が学問に目覚める機会を少なくしているのではないか。私が学生のときはもっと話をしたり、コミュニケーションをとったりとかがあったと思います。我々が学生のときとは違うと私は感じています。

池田：接触時間の意味は教育にはやはり大きいですね。

村岡：そうなると先生に意見も言えますし。

池田：こういう議論が必要です。今変えていかないと、大学の学びの環境がますます悪くなっていきます。これからが大学教育の再生ですね。

（文責　上垣）

****

3. FD研究会　第二部　ペア科目実践報告　2016年3月3日

田口先生の報告:「日本の文学A」と「日本の文学B」をペア科目で授業をしている。授業ではmanabaコースを使って、学生が提出したレポートのなかで良いものをWebにアップするなどして、フィードバックを行っている。負担は大きいが、やり甲斐がある授業である。他の学生のレポートを読んだ学生の反応が大変面白い。学生が主体的に関わって、私自身はフルマラソンの伴走者という位置づけにしている。ペア科目では前半15回、後半15回に分け、前半では昔の文学概論に相当するような授業を行い、後半ではかなり内容を絞り込んだ授業をしている。下町ロケットに例えるなら、2層だてで、1階部分が基本的なリテラシーを鍛え、そこからさらに2階にあげていくことになるのだろうが、2階から入っていくのは悪いのだろうか、2階から入って1階に下りていくにはどうしたらよいのか、などと考えている。これに対して日本の文学Cは半期15回なのでどうしても言い足らなくなってしまう。

土屋先生の報告: 1989年に赴任した時は生物学関係の科目は「生物学」だけであった。それが現在ではペア科目、通年科目、半期2単位科目と多様に展開している。今回のカリキュラム改革では「生物学のすすめ」を「生命科学のすすめ」(ミクロの世界)と「生物科学のすすめ」(マクロの世界)に分けた。「生物科学のすすめ」には通年科目とペア科目があり、通年科目では夏休みに課題をだしている。夏休みの課題は二種類あり、自然科学系の博物館探訪レポートの作成か、あるいは『生命の多様性』の要約のいずれかの選択にしている。ペア科目では日曜日にフィールドワークをさせている。実際にモノを見させての講義科目は通年が良い。ペア科目にするとどうしても座学中心になる。通年科目は夏休みの課題を課せる利点がある。フィールドワークは学生に感動を与えることができるので欠かすことができない。フィールドワークをさせると龍大の学生の反応は大変良い。

なお、この研究会の場で、小瀬経済学部長が提供したペア科目に関する貴重な資料が、

田口先生から紹介されたことを付記しておく。それは昭和62年3月26日付けの「昭和62年度全学カリキュラム改革委員会」名でだされた「カリキュラム実施案」である。その11頁には「受講生の学修負担を軽減するため、1セメスター4単位科目を基本とする。ただし、科目の性格上やむを得ない場合等は、2単位科目を考慮する。」と書かれている。

4 今年度のまとめ

セメスター制のもとでの週2回のペア科目の意義は、池田先生の報告で明確に述べられているので、ここでは繰り返さない。田口先生が実施したアンケート調査から、ペア科目は深く学ぶことができ、忘れにくく、すなわち知識が定着しやすく、授業内容がフィードバックされ、すなわち双方向の授業になっていることがわかる。

本学の教養科目のなかでペア科目が教育効果を発揮する条件と活用方法については、今年度の研究の中では、研究会などでは、次のようなことが指摘されている。受講生が多少多くても可能である(池田先生は240人、村岡先生は250-260人という数字を挙げていた)。双方向の授業を取り入れやすい。フィールドワークを取り入れることができる(ただし、この点では、通年科目がより有利)。また、週2回にしても池田先生が紹介した縦展開もあり得るわけであり、画一化ではなく、自由な発想が求められていることが分かった。

研究会や打ち合わせ会議などで出された個別具体的なケースをまとめ上げて一定の結論を引き出す状況にはまだないので、次年度も引き続き、同様な課題でFD研究に取り組みたい。

なお、今年度試験的に田口先生が実施したアンケートをもとに、アンケート項目を整理し直して、来年度はもうすこし規模を広げて実施したい。

田口先生「日本の文学A」でのペア科目に関する受講生アンケート調査　　2015年7月実施

1、ペア科目という形式についての満足度

学部	L	E	B	J	H	全体	%
満足	28	8	7	18	1	62	28.4
やや満足	39	10	3	8	1	61	28
ふつう	42	2	7	18	11	80	36.7
やや不満	5	1	4	4	0	14	3.2
不満	1	0	0	0	0	1	0.5
未記入	0	0	0	0	0	0	0
総計	115	21	21	48	13	218	

2、「満足」、「やや満足」と回答した学生が挙げた長所の理由

	集計	%(/123)
(1)「深い学び」、「充実した授業」、「多くのことを学べた」 (ex.深く学ぶことが出来た、より深められる、内容的に深い授業だから、内容を深めぎっしり学べた、じっくり理解を深めることができた。様々な作品に触れることができたなど)	52	42.3
(2)忘れることがない、内容が頭に残りやすい、(内容が抜けにくいetc)	27	22
(3)週2回のペースがちょうどよい、適当な頻度である、間を空けずに授業をうけることが	17	13.8
(4)フィードバッグがすぐにできる	5	4.1
(5)ほかの人の意見が聞くことができた	5	4.1
(6)単位数が大きい、1科目で4単位とれる	18	14.6
(7)いろいろな科目を1度に勉強しなくてすむ、テストの負担が少ない	3	2.4
(8)その他 ex.・休む回数が増えても30回あるのでとりもどせる ・答えのないものを追求できた。 ・そもそも週1コマは少ないと思う。 ・30回同じ先生にの講義を受けられると親近感が湧く。	14	11.4

注　自由記述のなかで類似している内容ごとにまとめて集計した。
複数にまたがっている場合はそれぞれカウントしている。以下の3～8の項目でも同じ。

3、「満足」、「やや満足」と回答した学生が短所として挙げている理由

	集計	%(/123)
(1)4単位落とすリスクがある(ハイリスク、ハイリターン、2単位＋2単位に分けてほし	12	9.8
(2)予復習の時間が取れない(反芻する時間がない、etc)	6	4.9
(3)多くの種類の講義をうけることができない、ほかの科目が重なっていて取れ	7	5.7
(4)時間割が作りにくい	5	4.1
(5)週2回は多い、しんどい、つらい、ハードである	5	4.1
(6)1度休むとわからなくなる	3	2.4
(7)救済措置が欲しい	6	4.9
(8)その他 ex.・講義の連続的な要素が強いので1日欠席するとその穴が大きく感じる。 ・ペア科目に限ってビデオ撮影、配信をmanabaで送信することはできないか。 ・受講人数が多すぎて学生が受け身の授業だと思う。 ・受講学年の幅があるので講義内容に対する方向性と深度がそろっていないと思った。 ・1度休むとわからなくなるので前回の重要な点、講義で取り上げた見解をプリントに書いて配布してほしい。 ・せっかく週2回やるのだから生徒1人1人の個性にあわせて講義してほしい ・検定をとることなどを必須にすれば講義の利点があがる。	18	14.6

注　(8)のその他のなかには短所というよりもむしろ提案として理解すべきものが含まれている。

4、「普通」と回答した学生が長所として挙げている理由

	集計	%（ /80）
(1)「深い学び」、「充実した授業」、「多くのことを学べた」 (ex.深く学ぶことが出来た、より深められる、内容的に深い授業だから、内容を深め ぎっしり学べた、じっくり理解を深めることができた。様々な作品に触れることができたなど).	12	15
(2)忘れることがない、内容が頭に残りやすい(その他、内容が抜けにくい)	7	8.8
(3)週2回のペースがちょうどよい、適当な頻度である、間を空けずに授業をうけることが	6	7.5
(4)フィードバッグがすぐにできる	2	2.5
(5)ほかの人の意見が聞くことができた	1	1.3
(6)単位数が大きい、1科目で4単位とれる	3	3.8
(7)いろいろな科目を1度に勉強しなくてすむ、テストの負担が少ない	1	1.3
(8)その他 ex.週2回でも時間が足りないと思う ・1日のうちに3限4限連続にしてみたらどうか	4	5

5、「普通」と回答した学生が短所として挙げている理由

	集計	%（ /80）
(1)4単位落とすリスクがある(ハイリスク、ハイリターン、2単位＋2単位に分けてほし	18	22.5
(2)予復習の時間が取れない(反芻する時間がない、など)	3	3.8
(3)多くの種類の講義をうけることができない、ほかの科目が重なっていて取れ	3	3.8
(4)時間割が作りにくい	2	2.5
(5)週2回は多い、しんどい、つらい、ハードである	6	7.5
(6)1度休むとわからなくなる	3	3.8
(7)救済措置が欲しい	6	7.5
(8)その他 ex.・わからない内容のペア科目は苦痛でしかない。 ・1日2コマ連続でしてほしい。 ・座るだけの授業で苦痛である。少人数で討論がしたかった。 ・30回ほぼほぼすべて出席して単位が取れないとすると、厳しすぎると思う。 ・成績を途中で開示してほしい。	13	16.2

6、「やや不満」「不満」と回答した学生が短所として挙げている理由

	集計	%（ /15）
(1)4単位落とすリスクがある(ハイリスク、ハイリターン、2単位＋2単位に分けてほし	9	60
(2)予復習の時間が取れない、(反芻する時間がない、など)	0	0
(3)多くの種類の講義をうけることができない、ほかの科目が重なっていて取れ	3	20
(4)時間割が作りにくい	0	0
(5)週2回は多い、しんどい、つらい、ハードである	3	20
(6)1度休むとわからなくなる	0	0
(7)救済措置が欲しい	2	13.3
(8)その他 ex.・先生が話している時間が長い ・教養単位は2単位でいい ・通年でやるのはどうか ・教養をペアでやる必要性を感じない	5	33.3

7. 回答した学生全体で、長所として挙げられている理由

	集計	%（ /218）
(1)「深い学び」、「充実した授業」、「多くのことを学べた」etc	64	29.4
(2)忘れることがない、内容が頭に残りやすい(その他、内容が抜けにくい)	34	15.6
(3)週2回のペースがちょうどよい、適当な頻度である、間を空けずに授業をうけることが	23	10.6
(4)フィードバッグがすぐにできる	7	3.2
(5)ほかの人の意見が聞くことができた	6	2.8
(6)単位数が大きい、1科目で4単位とれる	6	2.8
(7)いろいろな科目を1度に勉強しなくてすむ、テストの負担が少ない	4	1.8
(8)その他	18	8.3

8.回答した学生全体で、短所として挙げてられている理由

	集計	%（ /218）
(1)4単位落とすリスクがある(ハイリスク、ハイリターン、2単位＋2単位に分けてほ	39	17.9
(2)予復習の時間が取れない、(反芻する時間がない、など)	9	4.1
(3)多くの種類の講義をうけることができない、ほかの科目が重なっていて取れ	13	6
(4)時間割が作りにくい	7	3.2
(5)週2回は多い、しんどい、つらい、ハードである	14	6.4
(6)1度休むとわからなくなる	6	2.8
(7)救済措置が欲しい	14	6.4
(8)その他	36	16.5